新編水滸畫傳

五編

十

へ21
875
50

特
門 875
巻 50

神書佛書醫書國學
繪本 年中新古實買
手遊いろく淨瑠璃間
御注文アリ次第上

播磨町三休橋西入
河内屋孫兵衛

新編水滸畫傳 巻之五拾

東武 高井蘭山翁 譯編

明治三十年 月 日 購求

○公孫勝芒碭山小魔を誅に

却も九紋龍史進をもてめ。書を紋軍しる和よ。梁山泊の援兵

来りしかを沿て。翌日軍を分て再び戰んとせ。和ホ。ホの大敗ふ。

又一彪の軍を来ると若ればば。花榮。徐寧。史進ホ。齊しくるを。

えれとふふ。ホ。毛梁山泊の旌號ふ。宋江自。兵学究。公孫勝。朱を。

朱全呼延灼穆弘。孫立。黄信。呂方。郭盛ホとふの。三ふの勢を引

て。ふふる史をこれを迎へて。頂充。李袁ホ破られることを若しふ。

宋江これを聞て大ホ驚られ只呆れふる斗。呉用を出ていふく。先

軍るを收て陣を列に商議して敵を討べし。宋江ハ斯りに心

忙しく急に兵を出して戦をなさんとて。呉用が言を信じ給ひ。直に山下に
向かふ。此時天色已に暗しく。芒碭山の烟竜を張し。
恰も白昼の如くなれば。公孫勝良久しく山陣を固めて云るい。山
陣の策を考るに。必ず妖法を行ふものなるべし。今陣中に毒人
の殭蠶を顕ずい。妖術を行ふ者陣中に立が如へ。若軍ハ出軍を退け。
兵を屯し。我明日一つの陣法を敷て。彼軍を捉べし。宋江是を聞
て大に喜悦し。列ち三軍を二十餘里引退け陣を堅固に列ね。扨一つ
の陣営を設出し。公孫勝これを宋江呉用に見せ。めて云るハ。此陣
図ハ漢の末天下三分の時。諸葛孔明が石を擺べて陣を立る法な
して。四面八方八々六十四隊に分れ。其像は一つの形ハ尾たりに旋り
右に指り。天地風雲の機。龍虎鳥蛇の状を按。歌り陣に沖へんと

する時ハ各軍齊しく寂て。これを讓ぶ。歌已に陣中に入るバ。七星の旗
號を揺動すをおもうて。陣忽ち出蛇の勢ひに変じ。こゝに於て我
乃術を行ふ。彼に陣中に立て。前後に渉り。左右に門を開して。
一向攻に来ふて奔走せん。歌じ時。蹈軍を設けて。此内に退為し。
後に是を生捕るべし。宋江陣営の利を喫て大に悦び。号令
伝へて。計を三軍に示しく。又八人の猛将を列て陣をもうむ。
紀呼延灼。朱仝。花栄。徐寧。穆弘。孫立。史進。黄信に八傑なり。
又策進呂方。郭盛に左右に中軍を掌せ。宋江呉用公孫勝
の陣達を引て。お旗を揺しむ。朱武ハ六人の軍士を引て。山
坡に登り。歌の逃切和を聞て。法の親方に知しむ。是日
巳の刻に三軍山に近付て陣勢を寄さ。旗を揺鼓を擂て。戦を挑

るに芒碭山も亦金鼓を打鳴し。三人の大將齊しく山を下り。三子の軍を左辺に列ねて陣勢を布。右方は頂充李袞が軍を第一の大隊樊瑞是なり。両軍互に攻鼓を擂て喊の聲天地を驚せし処に三人の大隊をや陣前に乗て出て欲陣を伺ふ。樊瑞は元来武藝を絶し。妖術を善くといへども。却て陣法を深くしらず。宋江が軍なる両八方の陣を立て。中央に黄旗を建て。四方に陣を破んものとて。紛ち頂充李袞を命じて云。汝三人の大隊を引て欲陣を冲へべし。三人の大隊命令を承り。各軍器を持て。風の如くを待に乗り。樊瑞は上に立て。左の手は流星鎚を持。右の手は混世魔王の宝剣を提げ口の内に唱く呪法を唱へるに。怪風忽ち起下に

起て沙を飛し石を走せ。天陣地陣地暗くして日月光りなし。頂充李袞是を見て。時分は能ぞ。欲陣を冲やとて。又百の勢を引て喊を叫で冲来る。宋江が軍なる是を見て。三辺に分れしうべ。頂充李袞は中央を冲入るに。右続者とそ。三人の大隊十人ばかりなり。李俊の云ふは。宋江が三辺の軍なるに対住して。遂に幸陣を引回しなり。宋江云ふは。是を立て頂充李袞が陣中を突入るを見て。急ぎ陣遊を七星の旗號を揺しめられば。彼陣勢忽ち紛々として蛇の陣を変じなるに。頂充李袞は陣中に生て大に驚ぎ。東に鉋西を走。左を旋り右を走り。なるに樂武は山坡の上に立て。三人の大隊を紛小旗を振て東をさし。西を鉋るとき紛小旗を揺て西を指。約莫

公孫勝八卦門の陣図と説図

段景住初て宋江ふ渴する図

に五遍かくのごとしる処ふ。公孫勝これ見て急ふ宝剣を抜て呪法を云ごとるに。猛風忽ち頂充李衰が脚跟辺より起て天空く地暗く日月光なく。四方に一人の軍るも見えず。処て黒氣漫々として浸ふ押寄るに五十人の兵ども〳〵皆見えざりき。頂充李衰大ふ怖天し。四方八面に続て鬨を発し。何ぞ一筋の路もめくんや。夷人鬨を並べ。尚亦の方に驅るに。忽然として霹靂大ふ震ひしぐ夷人るを面さんとせ〳〵処に。俄ふ地陷て。る人ともに処て穽の内に陷入り。対に左右の伏兵並起て。遂に夷人を縛索牽陳ふ来て引返られば。宋江これを見て大ふ怒び急ぎ三軍を発し欲陳を冲せるに。樊瑞られを探ること能ず。這く山陰ふ引上り。兵を退き討せり。宋江先三軍を収めて本陣に帰り。法大師と共に帳中ふ入りる処ふ軍卒来

て頂充李衰を引出す。宋江見て。親自絆の索を解。懇に拯諭して云るハ夷人の英雄我を恨ることなれ。我他とふ戦場ふ陳でハ生捉も生擒るも。時の運ふ憑心られば。せ捉るも生何ぞ必しも恥んや。我久しく聞く。の大名を吻及び。なりとも山陳ふ招て。共に大義ふ聚らんと思りられ。生頂日まで合戦ふ逆らして。延引に有る也。貴下夷人り我を棄ずんバ。倶に梁山泊ふ入て大義を結ぶんや。夷人氏云を吻く地上に跪き云るハ。来〳〵多年及ひ夷の大名を慕〳〵る生。縁ありして当敵を殺せば。今日部て義士に欲〳〵ると後悔に。来〳〵已ふ擒とりしハ。死犯恒しとする処ふ。倒て懇情の云を彩り。感激方寸に迫れり。罪を免し命を捨て。聊大恩を報十せん。樊瑞今来〳〵夷人を失ひ。豈ように独立

とをいはんや。義の親ぶ内一人と。山陳に囲しゝ来るゝば。速に樊瑞を引て。共に
隆系いさせん。ちゝび宋君の義ハいん。宋江ぶ云已に死ぬゝば。莫去の
変ひ。ぼゝ立囲て樊瑞を陳んに。いんぞ一人と留め。一人を囲
さんや。衆人を速に事と調へ。我明日ちゝ好者とこを陳ん。衆人齊しく
謝して云是別大丈夫の為処。義樊瑞系ゝぶ陳に従ハぎんバ。活捉
て来ゝんに。義意を安んじて待ゆへとて。即日宋江ハ別れ。再び芒陽山の
下ハ帰りしぶ。小城ハ是を見て大ハ驚き。ぢちに引て山陳に上りゝ処に。
樊瑞ゝゝも衆人ハ遇て。来意を問られバ。頂充李袞答て云。我等已に
天ハ逆ゝ義犯にゝの罪を犯せり。樊瑞ぶ云。汝衆人何為かゝのごき
とを言や。衆人のこれを聞て。宋公明ぶ義気等さて。始終具に陳りしぶ
樊瑞大ハ感歎して云宋公明果してかゝの如き義士なゝバ。我ぶ等天ハ

逆べゝゝび。明ゝ皆山を下て宜しゝ隆系を求むべし。衆人ぶ云我ゝ衆人今日
再ゝび回りしも。兵士事を渉へんぶ為ゝとて。意に山陳を收拾て翌日暁に
三人同く山を下て。宋江ぶ陳前に為りしぶ。宋江是を迎へ帳中に入し
処ハ樊瑞ハ三人のこゝハ宋江ぶ徳義を感じて。各心を仰け膝を
吐て従ハ。然ゝ宋江ゝ弦大ハを芒陽山ハ邀へ。程く慇懃ハ答義
しられば。宋江兵従ゝぶ。列ち三軍を賞して。人馬の息を休めり。
樊瑞即時公孫勝を招して師弟の約を誓ひし処に。宋江遂に公
孫勝をして天雷天心の正法を樊瑞に伝へしめられバ。樊瑞大ハに
悦びゝ。宋江人馬を歌て数日逗留しゝ。
号令を伝へ。三軍を催し。弦大ハ従て。を引て山を下り。梁ハ梁山泊
へと急ぎしぶ。漸ゝ近く帰ゝ処に。蘆葦の内ゝ。一人の大漢ゝゝ

も。宋江を殺して宋江るより跳りて走り出て宮を宮を出るに。彼方
言て云。柔姓八段名八柔段。諱名を金毛犬と号て。京涿州の者なり。
平生小盜の乃中に徘徊し。走るを盜で業とす。今去一疋良る
を盜るが。毛色白くして毛の長さ八尺長さ一丈なり。一日の
間小強子里の乃を跑り。毛名を照夜玉獅子と号て。見ハめて
大金の王子が號るしるすしるども。孫羊家の下まで柔遂てこれを
偷ぬ。今ハ下小及時函の大名芳しきといへり。柔是歌を好するにより
なく後に年月を歩るしゆひつるに。武改ひ武るを教ゆて威教を好し。
丘山陳小加らんと欲し。已に淩州城の西南方芳氏市と云ふ小ふる。
芳氏志と云人の。氏人の牌に彼るを奪れ。作りに描く思ひ。武るハ見梁山
泊の宋公明のるるに率ふのことをるべるべると云られば。彼岸却て恐ロに

及び〳〵放ざ逃走りて一命を免れぬ。これ小依て武を後へ走る。宋江
武段柔住を見るに相貌凡るべし。いつ為笑宋の志ふ見えざるしば。
仙中まぐ抜で云るハ。汝が言のごくば先我山陳小來て宜〳〵く商議せて。
遂小引て梁山泊に帰りる。宋江小ハまや金沙灘小来りしば。晁天王自ら
迎へ聚義廳に入る。宋江彼樊瑞頂元李袞等に段柔住を引て。
晁天王に見えしむ。晁天王これを見て喜ぶ。列酒宴を設ける。弦大
杜を賞しふる。武時段柔住又かの言のことを云出して。是好漢を徴見し
るれば。宋江翌日載宗を芳氏市に発て。彼るの消息を探窺しめる
翌小第五日の午の下刻載宗已に回て晁蓋宋江等に弦所に行
るハ。彼芳氏市の内に絃て三子雑間の人家あり。その中に一間の大家あり。
為けて芳家府と号て。武家のをハと大金王の者うして。名を首長

者と呼ぶ。又人の男子を持るが為の虎と云撰ハせり。嫡男為蘆二
を為参。三を為索。四を為魁。五を為昇と号。又女人武藝の師なり。正
師史文恭。副師穆定と云女人も同じく為て市の内ふ立て又七千
の人を聚免列ねて。又十数の囚車を造り為に忍ばして云るハ。
我遂に梁山泊の強賊を捕へて。此囚車に入れ。直ぐ皮府ふ送て恩賞を
求めんと云り。又虎彼を教師史文恭ふ謂へ。我孫を犯さん
と為る。の見を速に除さぬハずんば。忽ちくハ後の患となるべし。宜しく
見を強しく史と。未ざ云も強しく。ざるに晁天王大ふ怒て云此奸賊いんぞ
かくのごとく云れるや。我自ら馳向て。彼賊を生捕べし。の孫ずんば
堅て再び山陳に飯るまじくして。牙を咬て憤り怒れば。宋江見を止て云。
晁君ハ山陳のを為る。豈怪しく出るべ。ぬや。素晁兄ふ智て発

向し。多迷賊を捉へて就まべし。自ら出ぬ。晁天王ハ休史。晁蓋が云見下ハ
彦くの合戦に疲れ。人度の討多ふ我自ら向ふべきる見下ハ
暫く休息を遂史。主〇て我ぬ。約附ふても見下馳向ひ史とて。ぬや
三軍を催し。為に宋江再これを孫しらども。晁蓋ふ云ねて耳ふ聞受入
び。遂に二十人の部伍を従て又多の人るを率し。翌日又史の附ふに
梁山泊を下り。為の大ハ皆宋江ふ従て山陳を出る。晁天王に
陳ひ山を為する大ハ。林冲。呼延灼。徐寧。穆弘。劉唐。張横。阮小二。
阮小五。阮小七。楊雄。石秀。孫立。黄信。杜遷。宋万。燕順。鄭天壽。歐鵬。
楊林。白勝。ふの二十人こ。宋江ハ呉用。公孫勝。等に弦歌と共に舎
沙灘まで送り。帝皆盃を執て。晁天王に勧める処に忽ち一陣の
怪風起て。晁蓋が彩に製る大旗の竿を半ら吹折る。弦人

見て大いわやしく。個々色を失ふぞ。呉学究徐て云。見刻
不吉の兆なれば。晁君須く日を改て出陣なべし。宋江もはじめ徐て
云。晁君今出軍の時小出て。驟小氏怪風起り。大籏の竿を吹折しか。
必ず大なる小旅て不祥なるべん。先日を延し改日出るありて然るべき
軍を回し。先氏出を避べ。晁蓋が云。天地の風雲何ぞ怪しとすべに
足んや。呉氏去暖の時節小彼を拿へずんば彼必定勢を書て再び
滅さんよ難るべし。我已に軍を出し。婦女子のごく。何ぞ風に怕れて自ら
止んや。宋江〻〻て徐と云べうべ。宋江見を呼て。いよ〻憂へ
狂再愈為められを変して為〻ざることを。晁蓋が運の極めといひべけれ。

○晁天王曾氏市に入て第に中

既に晁蓋出陣しなれば。宋江大小嘆じて山小回り。又戴宗を馳て。

軍の絆と探聴せり。扨晁蓋いえとして急なれば。曾氏市近く
を陣と定て。法氏令を引て陣小就ん。曾氏市を見るに。北水に方
を圍む。る崗三面を担り。孤小孤る。ぬ家。うる如に。柳林の間を
七八百の軍る実なる。高先小をむ大なる。白るを小乗て。徐を挑り。威風
凜々として相貌堂々。見列者ども。曾魁。曾魁大きい
なり罵て云。梁山泊の反賊。我正に海を投へて。厚く恩賞を求ん
こそ。曾なれ汝却て氏如に。天我小編を揚小如なりいうんぞ
と汝来て絆と更ざるや。晁蓋氏云て呼て大小怒り。作りめる徒と
活捉と。なりべ。豹子氏林冲るを亀せ。徐を挑て曾魁に海り合
戦ひ已に三十合に至れた。更に雄雄なるさざるる。曾魁暗に林冲
に敗ぐれと料り急ぎるを回し。柳の林小逃入るに。林冲い伏勢めり

んとるを勧て赴ざりり。晁蓋を收めて陣ふ町。法師とちん。男
阪市を攻んと議定し。翌日天子の人るを引く。男阪市のほふ。
列ち平川曠野の地ふ陣勢を列。鼓を歩減を発して。戦を攻く
る。男阪市の上に大石砲雷さる郷ふ。大軍一度ふ動て。一列に
陣を對し。七人の豪傑お並ぶ。中ニ正師史文恭あり。上ハ副師
蘇定あり。下ニ男家の晴子男塗あり。左ニハ男参男魁あり。右ニハ
男索男昇あり。各厳に板掛義に鎧扮ふ。史文恭ハ左の手に
弓箭を振り。右の手に戟を持。列彼玉獅子ふ乗ふ。三軍に
下知をして攻鼓三ツ打ましむ。男家の陣中より数騎の騎
車を撓出し。おのの云に見せ。男塗列ニを指さ。大に罵り
るハ阪反賊ふ我ひ騎車を見んや。我今日汝ふを活捉ひ騎車ふ載

ふ迷京ふ送て。恩賞ふ預ん。と号る。男子ふ。るを下て騎ふ乗て。一命
ぞ。ハ焼さんぞ。晁蓋ふも強ら。大ひに怒り。槍を振りて死せて
突出ふ。法師を見お續て斬て。軍已に入れ。時分り
戦ひ。列に。男家の軍ハいるる。不意やあらん。一度に親と林の内ふ
入れり。林冲ハ延灼を晁蓋が左ふ陣ひ。漸く一ツの陣を破て。
左陣に廻りるに。敵軍討死せる。多ぬ。晁蓋ハ。ふ憂ふ
なり。法師皆陣て云。晁君先ひ心を安んじて憂ふとなれ。我遣
数度の合戦ふ。宋江明幾次ふ。陣に勝利を拾ふ。恭
喜。阪陣ありこさ。今日の軍に歓親方各軍るを失ひ。勝負未ざ
ず。して戦ひお均し。何の憂ることを慰め。
と再三陣ふ。晁蓋さ。心を安んぜ。特岡。一連ふ三日

宋江正閻軍

史文恭の毒箭
晁蓋を
射る図

晁蓋の出陣
狂風大旗を折図

へい　たてい
云と発して戟を挑でるに。劉敦の陣中より一人の軍士もあえずして。
ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ
抜き絶て走りるが。第二日小旋て勾ち呉人の傍。晁蓋が陣中ふ来り。
ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ
列晁蓋にまゝえて云るハ負傷〳〵ハ乃ち芒砀市の東なる法華寺の
傷ゑてひが芒敦兄弟小動もせれだ。残糧を借られ寺已に衰微に及ぶ
ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ
此傷痍を退散し我〳〵呉人ハ系ふ彼ふが出没の地を知りるれ
より将軍を尋ね入まゐ〳〵せんがゐる。陣中ふ伺候せり。晁蓋氏云と呼て
大ふ悦び列呉傷を結て厚く歓待令くられと仮ど令れば林冲弥て云。
晁君怪〳〵呉傷の云と仮ど令れ怪〳〵くハ氏中に詐あ〳〵ん。
呉傷ゑれを笑て云るハ我実ハ是夜を忍しる泊つるに何ぞ敵と妄
ご　ご　ご　ご　ご　ご　ご　ご　ご　ご
仮とやさんや負傷〳〵久〳〵梁山泊の徳義を感じるる為。今日敵と
来て尋んとを欲も豈詐あ〳〵んや。晁蓋が云林冲軍自〳〵疑心を生
じて大事を誤べ〳〵び。我今宵軍を引て班師。速に芒敦の一党を
擒て氏然と雪くべし。林冲が云我実ま云と分て地面めべれば。晁君ハ
陣を去つて扣へ呉。晁蓋が云我り自〳〵向ハぢんば怪〳〵くハ士卒の心慢
ん。呉下ハ云と分ち陣を去り芒敦親分雖義ふ及ぶそと云ゐ。遂に来て
助け以〳〵て二千民百の云と分ち十人の大将とれ傍〳〵。列劉唐。阮小二
ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ
阮小五。阮小七。燕順。杜迁。宋万。白勝ふの十人。氏夜
晁蓋遂に人るを引て本陣を去ふ。彼ハ傍に随て。法華寺の前ふ
来り〳〵ば。晁蓋自〳〵寺中に入て見れば。只一人の傍もゐ〳〵。晁蓋彼
ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ　ぬけ
ハ傍ふ問て云。かく大ひ為る古刹の寺に何為ぞ一人の傍ゐ〳〵ざるや。ハ
傍答て云先ハも已に逃り〳〵ぬ。芒敦の兄弟に寺中を辱悩られ。若
干の傍ハ尽く皆退散し。只一人の老と数箇の侍ハ傍の〳〵ゐて。

自ら塔院の内に住す。將軍先ず此の如く人馬を屯し夜已に更
ぬ。我等家の陣中に案内致すべし。晁蓋云ふ家の陣い何れの不
ふ。ありや。呉偽答て云ふ。彼にはつの陣あり。小辺の陣を第家先ず
云へ。屯し居る処へ。此陣をどれ。あ偽の陣を破るに易
るべし。晁蓋云ふ何れの時分に打ぜ可きぞ。今夜
二更の時分。三更の時を待て跳打を不云ふ出て彼方さと
あば。必定を利多うしんとて。驚く彼居る処に。三更の鼓已に罷
ぬ。あ偽高先ふそんで晁蓋ふを引て。彼あ偽忽ち
形ちを隠して。ちえざりしぬ。第軍大ひに慌て驚て不迷晁蓋ふ敢ず。
呼延灼急に三軍を引て。百歩斗退き。処に。に下に鼓の勢齊しく
罷き。喊の勢地ふ震ひ。第後左右ふ跳て火把の光昼のごと。晁蓋

弦將と共に軍を引て。終に宋星ぐるり打ぬるに。一鹿の欲ふ
出て第弩一度に放ちれば晁蓋遂に流れ矢に中てるるふ倒
に落ふり。敵ふられを見て。一度に吐と喊の勢を揚て突出る処ふ
呼延灼燕順鄭天壽を並べて跑出敵を方右ふ突て勇猛ふるひ力を
つくして戦ひしぬ。此陣に劉唐白勝るを見せ跳打て晁
蓋を投けてるに。漸く村中を殺出し処に林冲を見て
跑ぐに跑敵し。をむ欲を迎へて。追つ返しつ。ふ敵ひ
るに矢を已に明しぬ。あ軍各先ふ陣ふ引ふり陣中に
回て親方の云を敷するに。二万五百の人る大半討れて僅ふ剰る処の
云へ。子二三百人まるぎりり。三院先者歐鵬。杜遷。宋万ふも已に
討れつるんと思ひるに。這く水中に逃へて一命を拾れり。扨晁

蓋小中りし矢を拽抜てこれをとるに。箭の上ふ史文恭といふ三字あり。晁蓋急死として大に怒りしが忽ち眼眩んで地上ふ暈倒せり。林冲急ぎ金瘡の膏薬を貼しかれば。程なく蘇生しぬ。氏箭毒と傳てあり。これを見て初て始終保ち難しとなげくこと。先晁蓋を請て轎に乗せしめ三阮兄弟に扛迎。宋万と限て即日梁山泊ふ送りる。その外十又人の大将ハ尚陣中に留て各嘆息して云るハ。晁天王這回の一戦に毒箭に中りぬふ果して旗竿の折る凶に急ぜし如すゝへ氏者既市を急に被らんを恐れ難るべし。先公を投めく他陣ち是可すゝんやと。伊義医々ちりる れに。呼延灼が云るハ。先家に明の号令来らんを待て。方にゝく退を交すべしそ。法大和尚贊

ゝて憂しゝぶ。士卒ハ已に慢て思梁山の男ひを侵れのみにして戦ん義勢さりにるゝ。氏衆二文時ちふ法和尚ゝく背岡に遍り差嘆特ゝ功りゝ。孫ふ蛇に訳ゝて扨び。多翅ゝ乃と発ぜとゝハ。ゝるとやゝ云なゝ。結る和に敵大軍ふて来ると被れば。林冲ら是を聞て一度に驚に赤赤。各陣外ふ出ゝ来ふ。故三方に敗ゝ走ゝ。大把三面に起りゝ光明くなると白昼のごし敵勢近く来て。喊の勢天地ふ振ひ動れ。林冲敗て戦び即法和を引く退さるゝ。敵勢ひふ乗じて逐来り。三面より元圍んで緊く攻しゝば。梁山泊の兵大ふ乱れ。四方八面ふ散て逃走り。彷莫に又十里ふ至て。敵兵漸ゝく遠ざゝりれば。林冲再び敗軍を收めて。人ると點撿ゝるふ又又七百人を失せり。法将皆浅合し。氏上ハ

下先山陣に回るべしと梁山泊を奪んで急ぎ帰るに。戴宗おくれて
到来り。事絡ふ旅て適遇刑号令と云ふ。彼れ宋江を伴へて一刻も急に
故陣帰るべしとのたまへば。林冲号令と共に。梁
山泊に帰りて見天王と見るに。已に渾身縛て飲食もそまざりしが。
宋江床の前ふ侍て涙く哭さ。親自膏薬を貼黄茶を灌ぐ。
懇ふ看病に。昼夜の区別なく。皆帳下に伺候して縛く
さるべく医療を尽せども。更に毫も効なきうり。高俅三更の時ふ晁
蓋病篤きり。終て息絶ぬと見えしが。宋江を初として諸所
各涙を洒で哭り対。晁天王眼を開き。刑宋江を見て云るハ。
宋将軍自ら悪ふ身を保ち更へ。我を射る彼史文恭を殺し
る者を以て山陣のもとしめ更へ。我今諸将軍と永き別れを

なくぞとて。嗚呼哀ひる遂に息絶。英泉の人とうりふる。宋江ハ
晁蓋が死しるとんて。終父母を喪ひしるごとく。哭を放つて大ひふ
哭さるふ。忽ち眼を眩し倒れしるべ。諸所の医師慌忙に扶け起し
る処に。呉用公孫勝来て云。生死は是定る所なるに。何ぞかくのごく
痛傷しるや。只宜しく悲みを省て大事を調へ更へ。宋江是を
聞て。涙を收め。即死首に香湯を浴で沐浴し正しく衣冠
を整さめて。棺槨ふ納め。張義廟の中央に安置して。茶飯に灵
牌を設け。梁山泊主天王晁公神主と書りり。山陣の諸所宋江
より以下。挙て孝服を整へられば。諸の軍卒ふに至る迄。縞素を掛
ざるハなりり。宋江終て近村の寺院ふ人を馳て僧を請待し。
毎日法事となりて。追薦対更懇こ。宋江ハ朝夕晁天王の事の

悲歎し、聊か慰じ。比附林冲は呉用公孫勝等に法既に亡とのに。宋公明と云て山陳のもとしめんとて計議し。翌日林冲を首と して。法豪傑宋江と為て。張義廳に会集し。呉用林冲先宋江に対し て云るは。宋君宜しく我等が云を少聴ん。古の張良も国に一日も君なく べうべうに。況ん一日もなるんべるべからずと云り。今日山陳に晁天王逝去 ありしかば。已ふを聞て。山陳の事業再び興し。豈又新にを立 ざらんや。抑宋君の大名は遍く蒼天の下に流れて。人皆仰ぎ慕ふ明日は 幸ひ吉日良辰なれば宋君を請て山陳のもとに。法既に行いよ〳〵 號令を承んとするに。必ずこれを辞し。宋江云是大に不 可と。何ぞ晁天王の遺言を忘れんや。陳強の時我が作て法あても史 文恭を殺し。さらんを。山陳のもとにしめよとこそ言ふ。法将

何ぞ比とを忘れ給ふぞ。いとんや赤ず晁天王の為に退薦の軍をぶに 為ざるに。めに示く比沙法ふ及んや。法は必ず晁天王の遺命を忘れ 大義に背さ給ふとうれ。呉学究又陳と云。晁天王の遺言いかゝの ごとしと。山陳が何ぞ一日もなりんや。宋君為られを辞し ぬ。山陳の人る自ら離散し。事業一日に虚うべし。然くは捨く 先比位が坐しぬへ。呉日が別に高議すべし。宋江云軍師の云 を可と。今日我捨く比位が坐すべし。改日史文恭を求て晁 天王の仇を報ひさん人めべを。何を強ぜば。ふ遂比位を譲る べられば。しかは比事を成し時が旋風李逵大小喽と云。宋君 すべうく梁山泊のを破んとして休ひて。大宋皇帝の位を慕ひ。 自ら一天下のをとなるべ。呉学究山陳にをさらんよりは大ひに楽

〻〻ん。宋江是を聞て。あざ罵て云。汝何ぞ又孔亮といふや。美髯びかく
のごとくといえども。先汝が舌を拔て罪を免べきぞ。李逵赤笑て云。我
宋君を謀めて社長ともなす〻べと云ども。舌を拔れんも死するべん。
今云〻孫に因て罪せられんハ云するべしとて。ほく〻氣色なりけり。呉
用が云。黒旋風ハもと忠義にして云後の言下ともなるべき者なるを。宋
君なんぞ彼が云〻ことを。是に責ふるふけるや。只速に大事を須へすべと
孫〻〻ぶ。宋江潔く怒りをおさへ。喪中を悔て居るふ。法豪傑の勧め
ゆえ。宋江列聚義廳の中央に香を焚〻め。第一位の座ふ坐るる。
第二位の座ふ呉学究。第三位ふ公孫勝坐す。左の一列ハ林冲
を除く。右の一列ハ呼延灼を除く。時ふ宋江法師に對して云
るハ。我今日拙く武位に坐を乃法師ハ力を合せ各天ふ替て道

を行べ〻。今山寨ハ人多く。昔日と異〻べ。宜〻く法師を
ふて。六陣をもち〻べ〻と議定し。先聚義廳を改て忠義堂と
称し後左右ふ二ツの陣を列ね。山下に一ツの水陣を張。是列ち李逵
ハ別に統て六陣を。又後山ふ二ツの小陣を設け。希山に三ツの實塩を
置。宋江又呉用と議して法師の座位を定む。先本陣忠義堂の
第一位宋江。第二ハ呉用。第三ハ公孫勝。第四ハ花榮。第五ハ秦明。第
六ハ呉方。第七ハ郭盛。左陣の内。第一ハ林冲。第二ハ劉唐。第三ハ史進。
第四ハ楊雄。第五ハ石秀。第六ハ杜遷。第七ハ宋万。右陣の内。第一ハ
呼延灼。第二ハ朱仝。第三ハ戴宗。第四ハ穆弘。第五ハ李逵。第六ハ歐鵬。
第七穆春。第陣の内第一ハ李應。第二ハ徐寧。第三ハ魯智深。第四ハ武
松。第五ハ楊志。第六ハ董平。第七ハ施恩。後陣の内第一ハ柴進。第

梁山泊に集る僧徒と鬼蓋の霊をまつる図

梁山泊主晁天王神

葉界惟新

定生滅法

安善安化命

二ハ孫立。第三ハ黄信。第四ハ韓滔。第五ハ彭玘。第六ハ鄧飛。第七、薛永。
水陸の内の第一ハ李俊。第二ハ阮小二。第三ハ阮小五。第四ハ阮小七。第五
ハ張横。第六ハ張順。第七ハ童威。第八ハ童猛。六陣猛て四十三人の
大将これをもちる。山前第一の関ハ雷横。樊瑞。第二の関ハ解珍。解
宝。第三の関ハ項充。李衮これをもちる。金沙灘の小陣ハ燕順。鄭天
壽。孔明。孔亮これをもちる。鴨嘴灘の小陣ハ李忠。周通。鄭淵。鄧飛。
これをもちる。山後の出路ハ右の小陣ハ王英。一丈青。曹正。これをもちる。
右の小陣を朱武。陳達。楊春。これをもちる。太義堂の右一帯の房中ハ
蕭讓文書を掌り。裝宣賞罰を掌る。金大堅印信を掌る。蔣敬錢糧
を掌る。右一帯の房中ハ凌振石炮を掌る。孟康ハ船を掌る。侯健
衣甲を掌る。陶宗旺城垣を築くことを掌る。その外の諸頭領一く

職をて掌る。又朱貴。石勇。孫新。張青。木の酒肆。旧のごとし。ひより梁
山泊益興て人心孫振し。終て宋江が下知に従ひ。ある日宋江
張将を召して云ハく。我ハ市に出るし。晁天王に
為に仇を報んと欲す。張将の不なへいハく。呉学究ハ云。去民
農夫の家ぶふも。喪ふ事ハ時に拳動をとめ。山陳の喪
事ハ百日もまさるべし。いかんぞ。ハ動しぬんや。ハ軍ハく喪を
もて百日の後軍の法に及びがたしべし。宋江ハ云に従して。ハく喪
をもちり。毎日ハ仕養して法事を営。晁天王を丁寧に追福に。
一日北京大名府龍華寺の僧大圓和尚雲遊して。梁山泊の下に
ゆきしに。宋江刈これを接待しく。山陳に迎へ後日法事を修せし
めて後。宋江厚くこれを餐飡し。宋張已に終り。紙小宋江又大園

と云ふ。和尚に對して小京に豪傑ありやと云ふれば。大圓ゞ云ふ將軍何ぞ何か
の英雄玉麒麟が大名を聞くざるや。宋江これを聞て忽ち驚ひ出して
云ふは彼小我玉麒麟がことを忘れたり。彼はもと北京の大員外。姓は盧。
名は俊義。渾名は玉麒麟と号して武藝は天下に双なる達人なりと
称美し。私小吳用に向ひ。某は人を以て千百万の欵を乞かとも。何の
憂ることかあらん。吳用が云彼を山陣に招ん事は容易し。宋江が云
彼を是小京第一の長者なれ。いかんぞ能山陣に彼を招んや。吳用赤
眼と云。我已に一の計策あり。宋君これを憂ひなかれと。低云
と云。是は先大名和尚を欵待しなり。もと雲遊の僧なれば。別れを告
布施物を乞て云ふ。宋江吳用に對し。軍師いかゞ計を以て。盧
俊義を山陣に招んやと問ふれば。吳用暫て彼を招んとは素自ら

小京に能て彼に遇。こすれば煙の去て空しく鎌し。終に山陣に
招ん。しむべし。第一人大僧なる豪傑を引て。ともに往ば可なりんや
思へば。只眼らくかくのごとき大膽なる人あらんと尚来ざるも弱ざる
に。是旋風李逵をもて云ふは。素軍師に跪て能招ん。軍師使ひ
なるべきや。吳用打笑て云汝は是人を殺し。火を放つこと能すと
ども。此間のごとき汝が能なる所にあらざれば。いかんぞ汝を使ふや。
李逵是を聞て大に焦燥て我是なりとも。何ぞ是ちのことを暁ざ
らんやと。眼を含で云ふれば。宋江是を按撫して云。汝妄りに眼らること
なかれ。小京大名府に別して下友多きを而なれば。彼必ず汝が云ふ風
俗の他に吳なるを疑て擅に出ることもやあらんと。軍師これを恐れなひ
てこそ。汝を伴ひなれん。況て軍師を煩むべくんと。懇に強ふるに。李

達これを吟味りて云ふ。我山陳の為に一命を捨んと不来者もしと
する紅ちるに。吾〻くは軍師水火の間くりとりふを。我を使ひ給へ。我肯て
力を竭さんと。数りに願ひ〻〻。呉学究云ふ汝我が三つの事ふ行ふ。我汝
を使ん。り〻ぜんぜん。汝は只山陳ふ留るべし。李達云三つの事はさて置き
の事くりも。軍師の吾に授ん。ふ〻〻是を示し給へ。呉用云。第一は酒肉
に酒肉をしてそれば今日より酒を禁ずべし。第二は酒道童の形に出立べし。我
ふも何ふのことを示しても是ふを〻くことなれ。第三は酒今日より一云
も云ばして唖子を假すべし。此三つの事能て能ちば我汝を使ん。
李達これを吟て云ふは是らのと何で難しとるふ是ん。唖子を假ん
ふ。一個の殘を口に啣へて。言ふまじきを。是又易に而。宋江又李達ふ
對して云汝自ら切に往んと願ふ由。我あくて探しべ。万一張て官

軍ふ捉るを。必ず我を殺ることなん。李達云遮莫我此二つの
事とに勢へ。彼方〻を殺して慰んふ豈反て宋君を恨かさんや
とて。もや是に拳を捏りしを。弦孔笛これを吹て各一笑を催しる。
扨此盧俊義山陳ふ入一条ふ事出れば。次の六編に伴ふ。又別に
市を求て盧俊義竟に史文恭を生捉晁天王の仇を亡に次第六編
に明細なり

編者いふく晁蓋号此市の軍。紫因もちゐ敬地ふ在〻〻〻傷
の言ふ詐れ白〻と計に陷るとふ。小児の戯ふ等し。さるうの虚氣
者が。一日くりも山陳のをとして。修多の豪傑を指揮ちべこと。
作者の看官を思ふするをとること良

新編水滸画傳卷之五拾弐

和漢
西洋書籍賣捌處
神書佛書醫書國學
繪本草子新古賣買
群玉堂河内屋茂兵衛
河内屋茂兵衛